

『函館ワンニャン物語』 ⑩ ～譲渡会 2～

◆野犬抑留所（譲渡会）

館岡家族は、日吉が丘で保護した5匹の子猫を譲渡会に連れてきていた。

目も開かないうちから、3時間おきにミルクを与えてた子猫である。

優しい人にもらわれ、幸せになってほしい、そればかりを願う家族である。

アニマルレスキューの代表は、長年の夢が叶い、生き生きと活動している。

代表「先生、本当にありがとうございました。ようやく私の夢が叶いました。」

洋一「よかったですね。来てくださる方々も、予想以上に多く、びっくりしています。」

代表「一人でも多くの人に来ていただき、ここの様子を知ってもらえれば、それだけでも意味があります本当に良かったです。」

洋一「今日は、この間、日吉が丘で保護した子猫5匹を連れてきました。今がかわいらしさの絶頂期、代表さんも見てください。」

代表は、ゲージの中にいる5匹の猫を覗き込み、満面の笑顔で話し出す。

代表「まあ、本当、とてもかわいいですね。これならきっと、すぐにでも貰い手が見つきますよ。」

洋一「でも複雑な気持ちなんです。今、我が家には三十八匹の猫がいます。経済的にも苦しいので、出来

れば貰われて欲しいとは思っているんですが・・・」

代表「情が移ったってことでしょう。」

洋一「そうなんです。目も開かないこの仔たちをミルクでここまで育て、今ではもうすっかり情が移ってしまいました。できれば、あげたくはないんですが、そうもいきません。きっといい人に巡り合うと信じています。きっと幸せになると信じています。」

代表「そう、そう、がんばりましょう。」

洋一「そうですね。」

すぐそばで、聖子と二女の咲が5匹の子猫の世話をしている。咲は子猫たちに名前を付け、見に来ている人たちに説明している。

咲「このちょっと大きめの子猫が、ダニーです。5匹の中で一番のいたずらっこです。次にこれがプリン、とてもおとなしい性格です。この小さいのがキミーまだまだ甘えん坊さんです。そしてこの仔が、ミッシェル、こう見えてもかなりのきかん坊なんですよ最後にこの仔がステフ、落ち着いた性格で、しっかりものです。」

子猫のたちの名付けの親であり、家族の誰よりも一生懸命子猫たちの面倒を見た咲は、洋一と聖子以上に、子猫たちの行く末が心配であった。やがて、キミーとステフが貰われていった。

◆自家用車内（譲渡会からの帰宅途中）

洋一が運転をしている。  
助手席に聖子が坐り、後部座席に咲がいる。  
三匹の子猫を膝に抱き、咲は泣いている。

聖子「大丈夫よ。優しくな人たちだったでしょう。きっと大切にしてくれるって。」

咲は黙って泣いている。

洋一「今度会いに行こう。住所も聞いているし、昭和町だったらおばあちゃんの家付近だし、いつでも会いに行けるって！」

咲は泣きながら話し始める。

咲「変な飼い方してたら、許さない。絶対に取り返してくるから・・・」

洋一「そんなこと、当たり前だ。なあ、聖子、そうだろう。」

聖子「そうよ。その時はあなた以上に、パパとママが許さないから、安心しなさい。」

一週間後、家族で貰われて行った家を訪問し、キミーとステフが元気なことを確認する。咲も何とか安心する。

#### ◆館岡家宅（玄関）

洋一が、ラブとクロの散歩をする準備をする。  
二頭の犬は、待ちきれないという様子で、しっぽをぶんぶん振っている。

洋一「ラブ、クロ、おいで」

待ってましたとばかり、二頭の犬が駆け出す。  
二頭の首輪にリードを付け、出かけようとした時、  
洋一は幻を見る。

洋一「ムック・・・」

三本足で、必死に散歩に付いて行こうとするムック  
の姿を見る。  
しばし立ち竦み、やがて我に帰る。  
小雨降る大森浜を、二頭の犬を連れ散歩する洋一。  
涙が頬を伝う。  
ムックが逝ってからは、洋一は「函館の雨はリラ色」  
を口ずさむことはなかった。

(「函館ワンニャン物語 ⑪」へ続く・・・)